

啄木全集

第一卷

啄木全集

第一卷

筑摩書房

啄木全集 第一卷 歌集

一九六七年六月三十日初版第一刷発行
一九七六年八月五日初版第十一刷発行

著者 石川 啄木

発行者 井上 達三

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
株式会社 筑摩書房
電話 東京 例七六五一（代表）
振替 東京 六一四一二三
郵便番号 一〇一―九一

本文用紙 三菱製紙
表紙クロス 東洋クロス
印刷 多田印刷
製本 矢島製本

(分類) 0332 (製品) 70801 (出版社) 4604

目次

歌集 一握の砂

歌集 悲しき玩具

新聞に発表された歌

岩手日報

小樽日報

釧路新聞

国民新聞

東京朝日新聞

東京毎日新聞

雑誌に発表された歌

爾伎多麻

盛岡中学校校友会雑誌

明星

小天地

一 七

紅苜蓿

心の花

春潮

新天地

敷島

スバル

創作

学生

曠野

文章世界

精神修養

早稲田文学

秀才文壇

新日本

層雲

一六〇

一六〇

一六四

一六六

一六七

一六八

一七六

一八九

一九三

一九六

二〇〇

二〇四

二〇八

二〇九

二一一

詩歌

歌稿ノ一ト

明治四十一年歌稿ノ一ト 暇ナ時

二四

明治四十一年作歌ノ一ト

二九

明治四十二年作歌手帳

三〇

明治四十三年歌稿ノ一ト

三六

断片

三五

日記より

秋韻笛語（明治三十五年日記）

三九

書簡より

その他

甲辰詩程（明治三十七年日記）

二四

浪民日記（明治三十九年日記）

二五

丁未日記（明治四十年日記）

二六

明治四十一年日誌

二七

明治四十二年ローマ字日記

二八

明治四十四年当用日記

二九

日記帳余白所載歌

三〇

解説

小田切秀雄

三〇

解題

岩城之徳

三一

全歌索引

三二

三三

三四

三五

三六

三七

三八

三九

四〇

歌集

一握の砂

世の中には途法も無い仁もあるものぢや、歌集の序を書けとある、人もあらうに此の俺に新派の歌集の序を書けとぢや。ああでも無い、かうでも無い、とひねつた末が此んなことに立至るのぢやらう。此の途法も無い処が即ち新の新たる極意かも知れん。

定めしひねくれた歌を詠んであるぢやらうと思ひながら手当り次第に繰り展げた処が、

高きより飛び下りるとき心もて

この一生を

終るすべなきか

此ア面白い、ふン此の刹那の心を常住に持てることが出来たら、至極ぢや。面白い処に気が着いたものぢや、面白く言ひまはしたものぢや。

非凡なる人のごとくにふるまへる

後のさびしさは

何にかたぐへむ

いや斯ういふ事は俺等の半生にしこたま有つた。此のさびしさを一生覚えずに過す人が、所謂当節の成功家ぢや。

何処やらに沢山の人が争ひて
鬭引くことし
われも引きたし

何にしろ大混雑のおしあひへしあひで、鬭引の場に入るだけでも一難儀ぢやのに、やつとの思ひに引いたところ
で大概は空鬭ぢや。

何がなしにさびしくなれば

出であるく男となりて

三月にもなれり

とある日に

酒をのみたくてならぬごとく

今日われ切に金を欲りせり

怒る時

かならずひとつ鉢を割り

九百九十九割りて死なまし

腕拱みて

このごろ思ふ

大いなる敵目の前に躍り出でよと

目の前の菓子皿などを

かりかりと噛みてみたくなりぬ

もどかしきかな

鏡とり

能ふかぎりのさまざまの顔をしてみぬ

泣き飽きし時

ころよく

我にはたらく仕事あれ

それを仕遂げて死なむと思ふ

よごれたる足袋穿く時の

気味わるき思ひに似たる

思出もあり

さうぢや、そんなことがある、斯ういふ様な想ひは、俺にもある。二三十年もかけはなれた此の著者と此の読者の間にすら共通の感ぢやから、定めし総ての人にもあ

るのぢやらう。然る処俺等聞及んだ昔から今までの歌に、斯んな事をすなほに、ずばりと、大胆に率直に詠んだ歌といふものは一向に之れ無い。一寸開けて見てこれぢや、もつと面白い歌が此の集中に満ちて居るに違ひない。そもそも、歌は人の心を種として言葉の手品を使ふものとのみ合点して居た拙者は、斯ういふ種も仕掛も無い誰にも承知の出来る歌も亦当節新発明に為つて居たかと、くれぐれも感心仕る。新派といふものを途法もないものと感ぢがひ致居りたる段、全く拙者のひねくれより起りたることと懺悔に及び候也。

犬の年の大水後

藪野 棕 十

函館なる郁雨宮崎大四郎君

同国の友文学士花明金田一京助君

この集を両君に捧ぐ。予はすでに予のすべてを両君の前に示しつくしたるものの如し。従つて両君はここに歌はれたる歌の一一につきて最も多く知るの人なるを信ずればなり。

また一本をとりて亡児真一に手向く。この集の稿本を書肆の手に渡したるは汝の生れたる朝なりき。この集の稿料は汝の薬餌となりたり。而してこの集の見本刷を予の閲したるは汝の火葬の夜なりき。

著者

明治四十一年夏以後の作一千余首中より五百五十一首を抜きてこの集に収む。集中五章、感興の来由するところ相^{ちか}遇きをたづねて仮にわかつてるのみ。「秋風のころよさに」は明治四十一年秋の記念なり。

我を愛する歌

東海のとうかい小島のこじま磯のいそ白砂にしらすな

われ泣きぬれて

蟹かにとたはむる

頬ほにつたふ

なみだのごはす

一握いっかくの砂すなを示しめし人ひとを忘わすれず

大海たいかいにむかひて一人

七八日ななやうか

泣なきなむとすと家いえを出いでにき

いたく錆さびびしピストル出いでぬ

砂山すなやまの

砂すなを指ゆびもて掘ほりてありしに

ひと夜よさに嵐あらし来きりて築きずきたる

この砂山すなやまは

何なにの墓はかでも

砂山すなやまの砂すなに腹はら這はひ

初恋はつこひの

いたみを遠とほくおもひ出いづる日

砂山すなやまの裾すそによこたはる流木りゅうぎに

あたり見みまはし

物言ものいひてみる

「いのちなき砂のかなしさよ」

さらさらと

握れば指のあひだより落つ

しつとりと

なみだを吸へる砂の玉

なみだは重きものにしあるかな

大といふ字を百あまり

砂に書き

死ぬことをやめて帰り来れり

目さまして猶起き出でぬ児の癖は

かなしき癖ぞ

母よ咎むな

ひと塊の土に延し

泣く母の肖顔つくりぬ

かなしくもあるか

燈影なき室に我あり

父と母

壁のなかより杖つきて出づ

たはむれに母を背負ひて

そのあまり軽きに泣きて

三步あゆまず

飄然と家を出でては

飄然と帰りし癖よ

友はわらへど

ふるさとの父の咳する度に斯く
咳の出づるや
病めばはかなし

わが泣くを少女等きかば
病犬の
月に吠ゆるに似たりといふらむ

何処やらむかすかに虫のなくごとき
こころ細さを
今日もおぼゆる

いと暗き
穴に心を吸はれゆくごとく思ひて
つかれて眠る

こころよく
我にはたらく仕事あれ
それを仕遂げて死なむと思ふ

こみ合へる電車の際に
ちぢこまる
ゆふべゆふべの我のいとしさ

浅草の夜のにぎはひに
まぎれ入り
まぎれ出で来しさびしき心

愛犬の耳斬りてみぬ
あはれこれも
物に倦みたる心にかあらむ

鏡かがみとり

能あたふかぎりのさまさまの顔かほをしてみぬ

泣なき飽あきし時とき

なみたなみた

不思議ふしぎなるかな

それをもて洗あらへば心こころ戴かぶけたくなれり

呆あきれたる母ははの言葉ことばに

気きがつけば

茶碗ちやわんを箸はしもて敵たかきてありき

草くさに臥ふて

おもふことなし

わが額ぬかに糞ふんして鳥とりは空そらに遊あそべり

わが髭ひげの

下した向むく癖くせがいきどほろし

このころ憎にくき男おとこに似たれば

森もりの奥おくより銃声じゅうせい聞きこゆ

あはれあはれ

自みづから死かしぬる音おとのよろしさ

大木たいぼくの幹みきに耳みみあて

小半日こはんじつ

堅かたき皮かはをばむしりてありき

「さばかりの事ことに死しぬるや」

「さばかりの事ことに生いくるや」

止とせ止とせ問答もんたふ

まれにある

この平なる心には

時計の鳴るもおもしろく聴く

ふと深き怖れを覚え

ちつとして

やがて静かに臍をまさぐる

高山のいただきに登り

なにがなしに帽子をふりて

下り来しかな

何処やらに沢山の人があらそひて

鬨引くごとし

われも引きたし

怒る時

かならずひとつ鉢を割り

九百九十九割りて死なまし

いつも逢ふ電車の中の小男の

稜ある眼

このごろ気になる

鏡屋の前に来て

ふと驚きぬ

見すばらしげに歩むものかも

何となく汽車に乗りたく思ひしのみ

汽車を下りしに

ゆくところなし

空家に入り

煙草のみたることありき

あはれただ一人居たきばかりに

何がなしに

さびしくなれば出てあるく男となりて

三月にもなれり

やはらかに積れる雪に

熱てる頬を埋むるとき

恋してみたし

かなしきは

飽くなき利己の一念を

持てあましたる男にありけり

手も足も

室いつばいに投げ出して

やがて静かに起きかへるかな

百年の長き眠りの覚めしごと

呟呻してまし

思ふことなしに

腕拱みて

このごろ思ふ

大いなる敵目の前に躍り出でよと

手が白く

且つ大なりき

非凡なる人といはるる男に会ひしに